

2021年9月19日（日）／説教者：國分美生

説教：「これはまったく神のみ業」

聖書：マルコによる福音書2：1～12

イエスがカファルナウムのある家におられたとき、中風の人を運んだ4人の人たちが来ました。中風は脳卒中などの後遺症で半身不随になった状態で、言語障害もあります。共同体の中に居場所がなく、もしかすると家族からも疎外されていたかもしれません。4人の人たちはこの病気の人側にいてその心身の苦しみをよく理解していた人たちでした。イエスは病人に「あなたの罪は赦される」と言いました。そこにいた律法学者たちが「神を冒瀆している」と怒りましたが、そんな彼らの目の前で、イエスは罪の赦し＝病の癒しの業を行ってみせました。物語の最後に差し掛かるまで、この病人は、ただ誰かによってイエスの元に運ばれて、癒しを受けるだけです。

5節の「信仰」とは本来「信頼」と訳されるべきでしょう。病人の苦しみに対する四人の共感共苦、なんとかしたいという思い、そこには4人の人と病人の深い結びつきがありました。今日本では「自助努力」「自己責任」という考えが社会に根強く広がっています。「権利を主張する前に、まず責任を果たせ」という言葉を刷り込まれます。イエスは「助けてほしい」とご自分の元に来た人はもちろん、自分の口で「助けてくれ」と言えない人にも癒しの業を行いました。その人が何に困窮しているのかを見つめ、応答しました。イエスのみ業やまなごしは当時の人々の「律法を守れば守るほど、神から祝福を受ける」という常識を覆すものであったでしょう。

中風の人をした一つの大きな役割を私たちは12節に見ます。癒された人を見て人々は皆驚き、神を賛美した、とあります。この人が癒された様子は、人々に対する大きな証しとなったわけです。またイエスは「起き上がり、床を担いで家に帰りなさい」といわれます。それは「あなたが苦しんだ経験、痛みの記憶、それを持っていてもあなたは大丈夫。それがあなたを豊かにしてくれる。」と励ましのメッセージに聞こえます。

神のみ業は社会の最も日の当たらない部分に働かれます。主は最も助けを必要としている人と共におられ、立ち上がらせ、そこから神の国は広がっていきます。今私たちの目には、弱くされた者たちが切り捨てられていくばかりの社会が見えていますが、主と共に、私たちが弱さを絆とするところにみ業を働かせてくださることを信じて、その希望を携えて今週も主のみ業に参加していくことが出来ますように。(國分美生)